

# 地中海

*MARE MEDITERRANEUM*

2019. 2



平成31年2月1日発行(毎月1回1日発行)第67巻第2号

No.729

## 創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来、ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

# 地中海

二〇一九年二月号 (通巻七二九号)

◇今月の二十首詠……アカパンサス 中島彰代 2

■作品A 高橋和代・竹下妙子他 4

A 田井千恵子他 20

B 立見千代子他 48

C 高辻幸子他 62

A 山岸時子他 76

■オリーブ集 木谷英一・北山雪男他 38

◇今月の二人 辻田聡美・岡本小由里 16

香川進の生きものの歌 4 田土成彦 15

■B・C欄の歌人たち 木村文子 44

■遊覧寄港〈清方の旅と歌〉 茂木 斌 61

私と短歌との出会い (198) 森川淑子 19

◆第一歌集の頃 大浪美雪 15

寺尾妙子・斎藤信子 100

■歌壇月旦 磯田ひさ子 67

諦めずに、覚悟を持って

◇シルクロード・カフェ (責任編集) 木村文子 36

■十二月号作品批評 68

A……もとむらしげと・神田鈴子

泉 嘉穂子・庄野ひろ子

B……酒井 牧・永田進一

C……光広祥子

オリーブ集……三浦好博

今月の二人・作品評 久我田鶴子 18

最近の歌誌より (編集部) 101

支社・グループ揭示板 (洛東) 白子れい 97

本村誠人歌集『オカリナを吹き鳴らして』出版祝賀会 さとうちえこ 98

小林能子歌集『計算尺とゴジラ』出版を祝う会 関根和美 99

第67回地中海全国大会 (新大阪大会) ご案内 102

クリップ…… 103 神田通信…… 104

〈写真・歌合わせ〉作品募集……表3

(表紙デザイン) Tazuko Kuga

## アガパンサス

中島 彰代

昭和十三年生まれ。  
春日グループ所属。  
歌集に「塩をもちし」がある。

アガパンサス初めて見しは半世紀前南アフリカヨハネスブルグに

ぎんぎんの高度経済成長期駐在員社宅の庭に咲きゐる

若かりしわれらと幼き二人子の危なつかしきアフリカ暮らし

筑肥線学研都市駅に咲き盛るアガパンサスと始める晩年

瑞々と育む土と陽と水と迎へくれたりプルシャンブルー

鳥の声に誘はれ登り来し小径黄金色こがねに戦ぐ麦畑あり

「そんなところでなんばしよつと」「この里の緑の風に吹かれています」

前をゆく斑猫跳ねてまた跳ねて金属光に道案内す

おにやんま頭上低く飛び行き戻り調べすみしか帰りゆきたり

別れ来しあの人この人想ひつつ時に涙す恙なくあれよ

縁なき土地と言ふまじ元氣かと尋ねてくるる茄子など採りて

むかしむかし王都でありしこの土地の底方そこひに誰ぞ呼びゐるらむや

遙々と稲穂はそよぎその先の聚落の路を子等帰りゆく

広らなるオクラ畑に麦わら帽二つ動きて収穫すすむ

小袋にオクラ十本八十円生産者名出荷日記し

丈高きオクラの列の整然と吹かれて愛し淡き黄の花

畝たてて何の種蒔く切々と祈る様に似てゆつくり二畝

うなりあげて曼珠沙華もろとも薙ぎ倒す孤独なる野良草刈機を供に

境内に支石墓しせきぼ上石置うしおきかれるて当番の二人枯葉掃き寄す

支石墓

埋葬施設に巨石をのせた原始時代の墳墓の一つ。

中国東北地方から朝鮮半島、北九州に分布する。上石はその巨石。

雨の音夜更けて聴けりやあやあと喜びをらむ茄子胡瓜トマト

# 作品

## A

### 高橋和代

意外に

・桃

朝戸あけに紅白の落花美しきしばしは風よ雨よ来たるな  
 タクシーより二十歩の待合ひに息荒くをりあたり気にしつ  
 顔見知りとなりし患者の「大麥ね」礼も言へずに頷きしのみ  
 常なれば「お互ひにね」と返ししがこの日は言へずに送りたりし  
 点滴に気だるさ少しゆるみしも塀外はそのまま意外に美し  
 年末も年始も予定を決められぬ この身の付きて行ける迄と  
 あはれなる身は庭ぬちを眺むのみ鳥一羽の声を聞きしが

### 竹下妙子

橋一つ

・霧

何気負ひ生き来こし吾か橋一つ渡ればひとり朱き夕映  
 枯れ草と刈り取られたるどくだみの花は真白き十字を切りぬ  
 ひと夜にて萎えてしまはむ夕顔の見てゐしものはわれと朝霧  
 秋ふかみ花とざしゆく夕顔の汝はいかなる種子を残しし  
 コスモスの倒れしままに首もたげ終の姿を飾るいく日  
 秋の陽の明るきなかにすがりある柿の枯葉は小さく揺らぐ  
 柿の実の熟れたる汁に濡れそぼつ身に暖かきものの恋ほしき

### 高津砂千子

しもつき

・風

隧道を抜ければ友が待つているさくらもみじの燃ゆる駅舎に  
 野すみれやたんぽぽの花返り咲く水とてやらぬ庭の片すみ  
 霜月の庭に残りしミニトマト美味でなけれどあじわいのあり  
 麦の芽の出そろい胸をなでおろす去年の失敗思い返して  
 混みあえる新幹線の車内にて篤き病の姉をおもいぬ  
 四階の病室までの段のぼる姉に合わせてゆっくりゆっくり  
 週末のたびに見舞える姉のもと六度目が嗚呼葬りの日とは

### 滝田靖子

冬

・新

変はりたる景色もすで見慣れたる景色となりてまた冬がくる  
 ひさびさに寄りたる駅前のコンビニの店員の日本語上達してゐる  
 とどまると思ふ速さに流れ行く雪すこしづつ形を変へて  
 スタッドレスタイヤに変へればそれでもうわたしの冬の支度は終はる  
 スタッドレスタイヤに変へるその朝を遅い初雪の便り届きぬ  
 とどまれる速さに雲は流れ行き行くあてのないわたしが残る  
 重き荷を背負ひていくとふ人生の重き荷とは何冬は来たりぬ

高尾恭子

浪花遣通

・大

玉井綾子

月

・洋

オクターブ高き口上さえざえと右近は奈落の真上に座せり  
天空の道ひらきたり舳斗雲に右團次右近の父子を乗せて  
大阪の空はればれと八歳の右近だきよせ悟空は翔る  
海老蔵が背中ひとつで演じきる「め組」頭の法被の誇り  
自由軒の暖簾ぐれば横向きにオダサク老いて腰掛けている  
夕暮れの水掛不動は異形めき関東煮かんたぬみたいな大阪ミナミ  
旅に出た「くだおれ太郎」が戻り来ぬローマ字表記の浪華の巷

田土成彦

柳

・宙

虎谷信子

万博

・伴

葉を落とし尽くした柳が偉丈夫のやうに銀河の帯に真向かふ  
胸の上に諸手を組んで寝ぬるときあるいはこのままなどとは思はず  
目刺し二尾木綿半丁くづれ梅昼餉の贅をいただきます  
蜂蜜ときな粉を混ぜたヨーグルト明日はブルーベリージャムにしようか  
導入剤欲るにもあらず深更を鳴きつく虫に聞き入れるのみ  
微粉末の胞子が天の時を得て夢のやうなる衣笠開く  
借りてきた古代史講座積んだまま返却期限明日に迫る

田土才恵

家

・宙

中島央子

武州の月

・森

草も樹も絶えて抔ぐる寂寥を胸にとどめてわが故郷は  
魂は空っぽとなり朽ちゆる家のしずけさしんかんとして  
数年を空き家となりてわが家族おぼろおぼろと風にただよう  
父の居し部屋に父なし物置に土の残りし鎌ひとつ見ゆ  
手ぬぐいをかむりし母の背のむこう常山青し見放くる平野  
馴染まざる農事に半生いきし母方言もまた受け入れがたく  
人住まぬ家と思えど丹念にシンクの水を拭ういっとき

今週の宵の空には月見えず通勤電車に君を見かけず  
公園の時計は月の見当たらぬ宵に背伸びしひかりを増せる  
月の出ぬ夜は街灯と高層の窓がいくつもクローン作る  
駅に着き顔を上げればにじむ月こんな所にわれの良心  
3Dメガネを外して見るようなぼやけた月にかさすさく  
木枯しが鉄紺色の空を吹き月は口まで綿雲を巻く  
満月に手招きされて背を押され九九の声が行く下校の夜道

ふたたびの万博大阪に 決まれど七年とふ、年月をばふとぞ思はる  
岡本太郎の手になる 太陽の塔 近ぢかし。芸術はバクハツなりとかや  
かつての日 心躍らし列なして、世界の息吹きに ふふるよろこび  
「今日こんにちは今日こんにちは」の唄 なつかしく聞くも またよし声出しようたふ  
遠来の友らを泊めて 万博に案内せしか 想ひ出 あまた  
親しみこし日本庭園 折折に 集ひなごめる オアシスなるも  
吾らには絵そらごととなるあれこれが夢島万博にては生れてゐるらむ

そこはかとなく銀杏の匂ひたつ社の庭にまろびまろべる  
苦むして秋の日差しに乾くもの垣に積まれし幾つもの石  
山茶花の咲くべくなりてなつかしむ(ヤマチャカ)と読みし亡き弟よ  
耳順・古稀はるかにとほくなりけり晩秋あはき己が影ふむ  
捕虫網・粘着テープに庄さへられ因業カメムシ悪臭はなつ  
すみやかに過ぎゆく時よ松茸の土瓶蒸しの膳をかこみて  
望遠鏡のぞくにわが胸射ることく十月武州の月光呀ゆる

## 中島 義雄 歩み

感動を識らずなりたるわが耳が夜の鏡に大きく映る  
 細ほそと一対の脚動くゆゑ友の葬儀も歌会にもゆく  
 覺束なくなりし歩みを支へきて靴下抜けば指が息衝く  
 どうでも良き九十一歳の顔洗ひ去年娘の呉れしクリームを塗る  
 洗ひたる白髪さむく乾くとき震へて覗く窓の織月  
 林檎半分齧りて立てば腹中の傷もつ臓器の泣くこゑがする  
 皺深く悔悟秘めたる掌に今日初雪の真白を掬ふ

## 永塚 節子 野いちご

湖にかかる夕月十日月芋名月と人は言うらし  
 霜月の終り間近き湖にさざなみ起し風渡りくる  
 湖の向うに広がる北富士の演習場に野いちご摘みし  
 両腕にわれもこう抱え花摘みを手伝いていし少女のおりき  
 枯葉色の大地緑に変わるとも野いちご摘みし夏は還らず  
 日を浴びる桜通りのわくらばの表見するもの裏見するもの  
 師を三人友ひとり送り平成の最後の年の師走に入りぬ

## 白子 れい 未だも遠し

闇に響く安祥寺川の水の音今日のひと日を暗示するかに  
 東に明けの明星くつきりと 自ずとはずむ我の歩みの  
 街燈に生るる自の影と語りあい励ましあいて朝の散歩路  
 あさ朝を登る石段五十六神や仏の待ちたまう杜  
 美しきところが顔に現わると磨きみがかん己が心を  
 一步一步踏みしめ登りきたれるも未だも遠し人生の峰  
 人生には山あり谷あり川もあり流れ流れん終いの日までを

## ばばりようこ かまきり

銀の糸はりめぐらせてそのまなかひがなひと目を沈思考の蜘蛛  
 くれないに染め上げてゆきたる秋のいろ一葉なれど柿おさな木の  
 よたよたとかまきり道をよきりゆくを隠かれてはならぬ ついと取り上ぐ  
 そのせつな 振り上げし鎌に刺されたり汝が自由意志にさからいし故に  
 おうよしよし いとおしみつつつかえり あみどにそつとうつしてやりぬ  
 かまきりは西日を背に動かざり分身の影に安らきたるか  
 枯葉色となりたる汝のフロックコート残照のなか誇れるかたち

## 浜谷 久子 古社歌会

湧き水の豊かな稔りの郷まなか御社祀る心のひとつ  
 棟札の古色に浮かぶ建立の文字が翔る七百年を  
 御庭の奉納相撲土俵砂盛られる円錐祭りのまぢか  
 七百年の歳月しのぶ御社の秋の歌会日ざし穏やか  
 人つどう中に湧きくる温もりに忘れる時間日暮れの早く  
 御社を護る城山陽の差して植樹の楡が真直ぐに伸びる  
 椎の実を拾ういとまもなく下る石段古来の土地と別れて

## 浜本 芙美 心に花を

街路樹の頂点わずかに紅葉して季も乱調の霜月半ば  
 苔つんとかかぐ彼岸花目底にありて凡そ記憶となりぬ  
 七十歳活躍の年齢とはげまして硝子越しなる冬空みつむ  
 だんだんと嫌な女になるきざし口一杯のことを言いつつ  
 心に花を咲かさんとパンジーを植えしが風に震えるばかり  
 自らの老いしじみと感じおり今の若者と口にするとき  
 あの頃は良かったなあーの「あの頃」が或いは今かも大切にせん



檜垣美保子

霧

・晶

藤田美智子

柘榴

・新

邂逅と呼ぶべき今朝の富士の山千葉流山六階の窓に  
かがやける冬のみずみすくそこに見ゆれど岸辺にたとり着けざる  
からみたる葦草切られゆれており雪まじりなる山おろし吹く  
のほりゆく道の左右の熊笹のしげみにはだらに降りつもる雪  
晩秋の田の面の霧にくろきかけまぎれず歩む一羽と一羽  
ゲレンデを正面に見据え雪だるまだれか花咲く紫苑持たせり  
闇に目をこらしてみれば霧ながれ木立をしろく照らす満月

福田庸子

記す

・今

藤森巳行

後期高齢者

・銀

ふくらみの整はざりし遠き日を手繰りて共に山の湯の夜  
平野なる岡崎をくだる矢作川のふり仮名記す鉄橋わたる  
三河安城通過を告ぐる秋の日や刈り終りたる田の面あはきに  
共生を唱へし人をしのぶなり京亀岡の小幡神社に  
小学校の持ちものに我が名書きくれしを今宵は母の名我が記すも  
肌着すら名を記すなり老い老い母がショートステイに向かふ前の日  
断片の記憶に生くる老い母の日日水を注ぐサボテンの鉢

藤川和子

災害

・眉

船田清子

京都古書市

・天

初雪は例年とほり台風や猛暑の憶ひふつとよきりぬ  
災害を忘れ去るほど老いもせず平成最後の冬支度なす  
天心に冴ゆる満月いただきになづきに似たる雲を載せぬる  
晩秋の河口に今朝も鴨ふたつふくら胸に水の面押しゆく  
小春日にホツリふふめる仏の座亡き姉妹よ 立ち上がれかし  
野のすみれ食らひつて羽化したるオレンヂ色とは鮮やかすぎる  
身のめぐり知人隣人空家や更地 歳月はさびしく怖きものなり

気まぐれに飛びぬる鴉を秋空が高い位置へとつり上げてゆく  
〈何もせず暇にしています〉が言へなくて 柘榴はばつくり口開けてゐる  
引き受けてしまふ甘さを悔やみをり膝と踝きしきし痛む  
口開けぬままに萎める柘榴の実種皮は紅色づきみるや  
屋の間に溜めたる光の重たさよ首垂れて芒は夜を迎へる  
われのなかにわれは幾人盃を揺らしつつゆつくり数へてゐたり  
「沖繩の」問題と語り出すコメントに「福島の」とを重ねて聞けり  
前期から後期に変はる高齢者今日誕生日七十五歳  
一日の違ひで何も変はり無ししかし今日から後期高齢者  
新しく認知症検査も加はりぬ免許更新後期高齢者  
あと三年生きるかどうか分からぬが免許更新手続きに行く  
青春に戻りて単車すつ飛ばす百二十五CCスクーターを買ふ  
妻や子が死んでも知らぬと洪い顔我七十五歳のバイクライダー  
「かつこいい」褒めてくれしは四歳の孫あとの家族は嫌な顔する  
映像の京都古書市ま宙よりか「行きたいなあ」と さうねいつしよに  
人々に君紛るやと眼を凝らす古書市の雑踏秋日降るのみ  
古書市にて再びめぐり逢はむやと心はやれど夢のまたゆめ  
後悔は先に立たずと身に沁みぬ処分急ぎし古書のおれこれ  
未枯れたる脳なうに種も時かざれば芽生ゆるはなし歌も咲かざり  
季来なばによきつと伸び出で野を飾る曼珠沙華のことあらな わが歌  
歌の種求めゆかまし秋の野に草々の種裾を飾れば

牧 雄 彦 秋深む 大

台風に樹々なぎ倒されて宮の杜寒ざむと空は広くなりたり  
夕暮れて空より帰る鴉らは塙を失くしいづくにひそまむ  
四〇キロ離りて臥せる兄と姉今年のもみちひときは赤し  
休日の公園木々は色づきて子供らのこゑ空翔けめぐる  
ブランコを高く漕ぎゐるをみなこの父は見てゐる腕まくりして  
海峡は波しづかなり秋の日をはじきて潮目をくつきりと見す  
水脈を曳き小さき船が海峡を西へ向かへり待つ人やある

松 浦 禎 子 増子さん 羊

すこやけき時の姿を目の前にオンコロコロと誦したき夕へ  
十七段障子の棧の夕まぐれ旧荻野家の縁側に坐す  
夕ぐれの廁の軒に咲き残るさみしさ共にす雨後のあじさい  
がまずみの赤く熟るるを待ちわびるこの地に移り来て十年を経つ  
秘仏なるお薬師さまの華嚴院小槽の花序のゆるる山上  
水すましのお丸き輪うかぶ薬師池に増子さんの笑顔かけとなるまで  
わずかなるお布施なりしにわれの名を染め抜きし幡參道に立つ

松 永 智 子 雲 風

ひとを呼ぶこゑのひびきのあかるさにふりむくまひる秋をはるらし  
ひとりゆきまたひとりゆき目のかきりなびくすきの種の波しろし  
逝きしひとのことは不意にし蘇る空あかるくて師走に入りたり  
かなしみはひとりのものといひさだめふり仰ぐ空はやかげりそむ  
たたかひのかたちにとほき雲なればそのままにしてうすれゆくみゆ  
ひとのこゑ絶えたる夜の灯のもとに何書くとなくペンを持ち待つ  
先をゆくひとの背のかけいまに見えことばのとほしとほし言の葉

三 浦 好 博 鉄瓶の蓋 鈿

神なべて出雲へ行きて居座れる貧乏神とハッピーバースデイ  
倒れてはまた起き上がる噴水の風強き日の公園寒し  
犬吠の灯台を軸に夜もすがら音盤描きて星座は回る  
余生とは今を言ふらむ草刈りの行き来に見てるああ捨案山子  
塞上にはあらず屋上露天湯に「青菜の笛」を吟じゐるなり  
貧血の吾のため鉄分補給なり汁鍋に入る鉄瓶の蓋  
朗々と杜甫の「春望」吟じつつ丘畑の徑下り来たりぬ

宮 本 靖 彦 大阪師団 凌

大阪域見さくる寺の裏山に師団兵の墓標数百基立つ  
所風隊、名、階、年齢、死地記せる墓標数百基寒風に泣く  
艶のこす木蓮の大葉散らばひて産毛の蒼あらはとなりぬ  
何故にこの名貫ひしエゴの褐色の幹肌ざはり好し  
暗街を通り曲がれば月見橋霜月の月皓皓と照る  
労働力移入法案かまびすし生命も夢もありとし思ひぬ  
時おかぬテレビ対談凡頭に考への時与へず進む

三 好 聖 三 霜 月 伊

撒水に虹は立ちたちはやばやと芽吹きはじめた小松菜の上  
ひとりへと帰るすがらの街路樹にはつか匂える一葉がある  
死はいつも傍らにあると猫が言うこの霜月の朝の庭にも  
つつまりはひとりはひとりへ帰ること死出の旅程もそのようにして  
計らいをしながら喋る男いてあれあれと思う夕ぐれである  
昼飯はおにぎりふたつと卵焼き久世光彦は米にこだわる  
国売りし男の裔に侮られこの年もまた暮れ方となる

## 御代田澄江

沈下橋

・茨

庭の棗なつみづき初めし円うらなる朱き珠実を亡夫に供へぬ  
 久慈川の支流に掛かる沈下橋大河ドラマ「西郷どん」に毎回映る  
 久慈川支流里川に掛かる落合橋映画「フラガール」にも登場なせり  
 母われに見せたとふ子に伴はれ我も渡りぬ秋雨に傘さし  
 増水の濁流が橋すれすれに流れ目眩し途中しやがみ込む  
 対岸は夏草繁る土堤高く集落あるらし軽自動車行く  
 石名坂下る車に従き来たるギンヤンマ大きく秋園けにけり

## 茂木

斌

うり坊の郷

・埼

となり家の花梨はことし当り年大実あまた塀ごしに見ゆ  
 植系替へし見返草のよく育ち穂花よろしく花序咲きのぼる  
 記事にある「力不足」の三文字を「カネ不足」と読みどちらも俺か  
 歌帖といふ程にあらねどメモ帳は必携にして山路をゆくも  
 ごぶさたの畑にくれば滑草畑いちめんを覆ひ困らす  
 湯田出でて津和野へ走るツアーバスしやべり通しにガイドの吉野さん  
 道の駅うり坊の郷Katanaは秋市片俣猪蹴厄す

## もとむらしげと

子猫よ生きよ

・そ

朝日さす工事現場の前の道座れる猫に気づきて停まる  
 道の辺に平たくなりし猫ありぬ子猫がうつむき座しいる哀れ  
 トラックに母は轢かれて一瞬に平たくなりぬ子猫の前で  
 立ち上がる母をひたすら待つ子猫首うなだれて身じろぎもせず  
 何ひとつ意味もわからず黙然と座れる子猫の憐れなりけり  
 生まれて来て間もなき子猫に与えたる神の試練のあまりに酷し  
 生きものに不意の死のある悲しみを胸に刻みて子猫よ生きよ

## 八乙女由朗

湯場

・柴

あたたかき師走の入りに訪ねたる遠刈田温泉日帰りの湯  
 浴槽に居並ぶ裸自然なる整いありて老いを先とす  
 湯上がりのにむ「浦霞」冷たくてのど下りゆく生きいる証  
 誰が告げし蔵王連峰名の由来煩惱撲滅の兆しさやけし  
 三站持つ蔵王権現あらわれて世ならしせんか平成が去る  
 立寄れば懐かしき哉初代館長鹿島茂の「ごさいんホール」  
 登校のあした日毎に向かいたる蔵王連峰ありて真秀らば

## 山下雅子

踏切り

・習

いにしえのままに押し照る光ならん平成最後の中秋の月  
 鳴り出せる踏切りの鐘五十年の馴染みのひびき親しく聞けり  
 背に燥ぎ「でんだでんだ」と叫びし声この踏切りの鐘にのり来る  
 交差点にすれ違いざま「ごしゃかれる」耳打つ方言仙台の声  
 「のりんの」と言いてりんごを齧りし子孫八人の笑顔と写る  
 甘酸ゆき香りあふるる紅玉林檜こうぎんにひたるぬくもりあの団欒の  
 あげつらう言葉むなしく宙に浮く国会中継見ればなおさら

## 横田敏子

指定席

・福

小春日の日差しの中の試歩の道銀杏散りくるひらりひらひら  
 かさこそと心に落葉積もること逢いたき人への想いふくらむ  
 北へ行く新幹線に娘と二人今し発ち行く古里が待つ  
 秋の陽に黄色まぶしき石路に迎えられたり わが家に帰る  
 家中の窓開け放ち滞る空気一気に追い出して行く  
 とっぷりと茶の間の椅子に座りたり五十日振りのわが指定席  
 ふわふわの布団取り込む昨日今日この日常のまきれなき幸

吉 永 惟 昭

火口瀬

・熊

市 原 志 郎

あれこれ

・萬

神々の拓きし道を熊襲らも通いしならんカルテラ開きに  
北「流鹿」南の滝は「鮎返り」黒川・白川合流の谷  
狩絵巻展げしままの立野原地震は塞ぎぬ火口瀬の道  
火口瀬を攀じ登るべく考案のスィッチバック鉄路も閉ざしぬ  
誇りいし水力電気供給の貯水池もろとも呑み込みし地震  
風の避けの道かや丈高き皇帝グリア花の散りきわ  
思ひ出が寄り道させた道の駅 苦笑いしつつ渋柿剥いてる

朝 井 恭 子

ポインセチア

・森

退院のようやく叶い久々に靴履き歩く見馴れし街を  
供花もとめ入りたる花舗に溢れおりポインセチアの鮮烈の赤  
卓上のポインセチアの赤き鉢独りの部屋の焦点となる  
朝なさなポインセチアの鉢植えに水かけ声掛け一日始まる  
真紅なる猩猩木の鉢植えを室内に移しわれに冬くる  
幼児はポインセチアを指差して「アカイハツバ」欲しとねだりぬ  
いつしかに母の齢を越えたりと秋の夜長を弟に文書く

磯 田 ひ さ 子

万羽鶴

・森

去年行きし出水平野に越冬の鶴の飛来を新聞に知る  
市をあげて鶴を保護するとりくみに中学生の羽数の調査  
飛び来たる鶴の羽数が一万を超えれば出水市「万羽鶴」と言う  
をちこちに番の鶴か鳴き交はず「恋ふ」と発して「恋ふ」と応ふる  
たましひの使ひのごとく首を延べ群れなす鶴の水平飛行  
去年四人ともに出水の鶴を見き一日つひやし案内しくれし  
つつがなくあり経ればよし親しくば問ふさへもなほためらふ一人

雨の音しみじみ聞きいる夜半に思い出しおり疎開のあれこれ  
あれこれの思い出の中ゆるゆるとほどけるなり我の思い出  
リハビリの終わりし後に一杯のコーヒー飲むがならいとなりぬ  
かすかなる雨の音聞く夜の更けに我の生きざまを振り返りいる  
少しばかりの花を買い来て植えている妻の姿を見るは嬉しい  
車椅子押しくるる妻の息づかい時に荒唐となるは淋しも  
暮るるは早くなりたる街を我と同じ歩行困難の人も行くなり

大 浪 美 雪

羽 田

・森

京に住む姪よりメール「母の乗る旅客機羽田にダイバードよろしく」  
水漬きし関西空港降りられず羽田へ迂回の妹迎えに  
国際線迎えの多くは中国系いずこの国や ここは羽田ぞ  
二時間待ち現れし妹思いがけぬ我に驚き腕伸ばしくる  
羽田から東京駅まで妹と話は尽きずつかの間の逢い  
丸葉より大きめの蕒あさがおの振れたる葉にいもむし一匹  
三倍体処理をされたる朝顔に育ちたる蛾よ卵産めるや

奥 田 清 和

遠世のめだか

・大

国やぶれ自我にめざめしなりはひのうれひのはさま目覚めし女性  
教室に男尊女卑を説きむたる若き日ありぬ雨漏る教室  
月の砂漠金襴緞子のお嫁入り家を出てゆく女性の涙  
家族とふ絆はづされ自己主張とみに激しき世を如何にせむ  
衣食たりてなほ礼節を知らぬ世ぞ天網恢恢荒魂おはず  
大穴牟遲神・少彦名神も親はしき瑞穂の国の「はやぶさ2号」  
遠き世の猪名の川瀬の陽を浴びてめだか遊べるわがしづこころ

奥田陽子 一瞬の時 ・羊

はららげる大き樹のもどめぐりつつ拾う銀杏葉にあまじたり  
おそ秋の日射しに照れる銀杏樹を過ぎて小高き丘を目指すも  
ゆるゆると小高き丘を登りゆく三人となりて時速く過ぐ  
まっすくにみつむる幼き眼差しに耐え得るは何人も世界も  
手をつなぎゆく木下路おさな子はただますぐなる眼をして歩む  
おおいなる公孫樹の光の下をゆく幼なとわれと一瞬の時  
死の意味を知りいるならんおさな子のそらんじて言う〈絶滅〉の章

小野雅子 菊 ・羊

雨のあさ駐輪場の隅に咲く小さき菊の冴えし黄のいろ  
逝きし人すぎし宴を思ひ出す赤紫の「もつてのほか」に  
夏に買った塩飴がまだ残りゐて十月に戻りきたる真夏日  
以前なら話題となつた病のこと会議を停めず流されてゆく  
いちにんの短歌を文へにつづきめる歌誌のひとつが今日も届きぬ  
ああここにあつたと一人声あげぬ違ふ所を探して幾日  
水色が迎へに来てピンクと出てゆく雨の二人の中学生

菊岡栄子 せんぼの家 ・漣

「せんぼの家」出迎えられて入居する人の優しさつとに身に沁む  
視力衰えテレビは音に頼るのみその日のニュースの切れ切れとなる  
「ハーブの会」五人の見舞いを受けたれば想い出に咲く会話の楽し  
金沢の「法師」に泊まりしことなどを記憶にふかし七年前の  
別れ際一期一会と思えども又の出会いを待ちいる吾は  
季移りもう一枚を羽織りたし思いにまかせぬ入居の身には

菊地栄子 無花果 ・漣

真っ直ぐに彼方へ続く石畳ヒロインめきて背筋を伸ばす  
ちよんちよんと雀の遊ぶ散歩道へくそかずらの花も咲き出す  
几帳面に仕事をこなす先輩の後ろ姿が我を糺しき  
見るとなき〈コーヒー付き〉に眼ゆくホルモン亭に入りしことなし  
でくのほうと呼んでいいかなこの十年実のひとなき秋の無花果  
自らを励ますよき〈失敗は成功のもと、成功のもと〉  
振込みを訂正に行く惜けなき螺子緩むらし自覚ひしひし

木村文子 秋 ・羊

身ごもれる女性の傍らすぎるとき秋の初めの香り漂う  
そよと吹く風が女性を包み込みふわりと播らすコート裾を  
やわらかになだれる空気の塊を風と名づけて親しむ我ら  
篠懸の木を見上げいる右頬に秋の陽射しはこんもり乗りて  
立ち枯れし篠懸の木の肌白く秋の夕陽を吸い取るごとし  
風運ぶ木々の会話を聞きたくてひとそよふたそよ耳をすませる  
里ざくら、いちよう、いちい、里ざくら名札をつけて小学校に

草刈十郎 赤とんぼ ・世

平素より乏しきわれの思考力蒸発させて残暑続けり  
老いらみなまだまだ人生これからと胸張っていてふ敬老の日  
被害あまた与へて台風去りしあと何もなかつたやうな快晴  
流れ来る歌に合はせて手踊りのきれいに揃ふ車椅子なり  
きのふにはもどれぬ朝の空晴れて新しきけふ始まりにけり  
夜空には星のささやき地上には虫の声あり高原の秋  
赤とんぼとび交ひをれどあたりには人の姿の見えぬ村あり

## 國井節子

ドクターヘリ

・春

ヘリポートめざして今朝も飛んでゆくドクターヘリの音の重たし  
 いつの間に先発隊の鴨の来て池は活気の漲りてをり  
 この羽で何百キロを渡り来し鴨の筋力たくまじきかな  
 柿の木を庭に植ゑある家多し朱実かがやく大和の晩秋  
 もみち散り空から綿虫降りてくるあの日と同じ季節がまた来る  
 百舌が鳴き財鶴来て亡夫を呼ぶ鳥もさみしいわたくしもさみしい  
 春日社の使ひの鹿を友として一人寂しく病み伏す歌人

## 小泉泰清

敗者なれど

・う

慶喜公南洲翁敗者なれど後の世界の静寂に資す  
 不平武士束ねてあの世へ連れ逝きし西郷どんは総仕上げせし  
 慶喜公大政奉還せしあとの沈黙は維新の礎築く  
 蟄居後はもはら敗者になりきりし慶喜公の功労大なり  
 淀城をのがれて蟄居をせし公の卑怯な振舞ひ平和の曙  
 勝者より敗者が尊し慶喜公南洲翁は共に耐へ居き  
 ポツダム宣言つきつけられしその時に降伏すれば犠牲少なきを

## 河野繁子

霜月

・雁

はれの日は明けの明星ひんがしに確かめ霜月半ばとなれり  
 やや風の三つ辻まがりたどりつく核しずかに咲けり今年も  
 鳥の声せせらぎのおとかすかにて核のさかり仰きて佇てり  
 おごりなき核と時を共にする身のすきとおり霜月の昼  
 満開の桜は楚々と風に揺れ小さなはなびら散ることもなし  
 とおき日にこころの配線つながりしひとり逝けり 夜学のともし  
 夜学の灯こころに消えぬ原点に戻りてはまた核見上ぐる

## 小西美智子

平和の木

・大

通院の空を仰げばかりがねが「人」の文字なし渡りくる見ゆ  
 アオダモの木立はすでに葉を落とす検査結果を聞きにゆく道  
 外にいでて道ゆく楽し白く咲く小さな花をかがまりて見る  
 足の傷癒えたる今日は立ち仕事楽になりたりシチューを煮よう  
 「平和の木」と名づけられたる春楡の写真送り来 帯広の友  
 春楡が「平和の木」としてシンボルの帯広のまち友の住むまち  
 山茶花のくれないは散る音もなく師走に入りて風もなき日に

## 小林能子

花里

・羊

谷やから谷やへつづく鎌倉街道に隠れ家のごとく「花里」が在る  
 化粧室の鏡のなかに背中まるき姫の居れば母かと思ふ  
 歌集上梓祝ふつどひに給ひたる友らのことばやさしさに満ち  
 出合ひすらわが運命と位置づけて「地中海」への帰属の意識  
 秋の日のおだやかに差す歌の座に「歌が力になる」とふ真実  
 書きては消し口ずさびては書く歌のこの一首さへ気散じに非ず  
 ひとことでは語れぬMOJIBARA桃原邑子の沖繩を歌集「沖繩」は語りつけて

## 近藤栄昭

竜宮城

・福

尾瀬ヶ原小さき水路そのままを吸い込む竜宮地中にありぬ  
 竜宮の清水湧き出す尾瀬ヶ原手窪にすくう城の匂いを  
 尾瀬ヶ原の木陰に豊か沼尻川うねり流るる三条の滝へ  
 相部屋はカメラ三人山二人それぞれが語る撮りと登りを  
 山小屋の同室五人の一夜のはなし白河夜船も弾んでつきず  
 金賞の写真見せられうなずけばカメラ教室先生慣れたる  
 飲め飲め声聞こえるカーテンの隣のベッドは夜を惜しみいる

近藤芳仙

モンサンシエル . 信

フランスに迷子となれば言葉なし己の勘にすがりつくのみ  
軽井沢ほどなる街のシャトルバスされどフランス行く先見えず  
大通り端から歩み異国での迷子の己見つけてもらふ  
潮満ちて巡礼の人らのまれしと湿れる砂を踏みつつ聞けり  
大天使ミカエルの前にたどりつくお告げを請ひし人らを胸に  
この地にもフランス革命の気配あり牢獄のあとの古めける大車輪  
朝霧に浮きし聖堂夕べには窓の灯群に怪しさをみす

坂上直美

メット劇場 . 天

坐ること遂になからん紐育メトロポリタン劇場の椅子  
映画とは魔法の世界わが前にメトロポリタンオペラの幕開く  
結末は死と知りおれどハラハラと物語追う歌劇「アイーダ」  
神官の厳かな声響きけり「裏切り者のラダメスに死を」  
アムネリス汝が苦しみの尊けれ誇りを胸に女王となれよ  
我にもしメソソプラノの声あらば歌うカルメンいやアムネリス  
誰もみな運命を背負い生くるのみ君を愛して命終えなん

坂出裕子

もみち . 洛

朝光の庭に落葉をひろひつつ今日を生きなむちからいたたく  
こんなにも美しきものかなくれなるにもゆるいのちの秋の木の葉は  
生きゆかむ力湧きくるくれなるに燃ゆる木の葉を見上げつつ  
くれなるは日毎まさりて花水木もみぢ散りゆく風に乗りつつ  
雨に濡れひときは深きくれなるのみちうつくし炎ゆるいのちの  
人住まずなりたる家の蔦紅葉くれなるふかく夕べ照り映ゆ  
のこりなく葉を落としたる桃の木のほのかに白き花芽ふふめり

佐久間 晟

日乗(二八) . 湾

花が咲く鳥が啼くとて詠いしも何のためなり今に虚しき  
生きる死ぬただそれのみの人生に何に抛らんかこの歌作り  
脚力の頓に弱りしこの日頃行きたきところの頓ちては消ゆる  
身の自由効かずにひそむこの日頃「ひそか」と言う事しじみと知る  
あわれとは思わざれども齢というこの現実に腐れゆくこの身  
人と会わぬ日もありたれば何なりと語れる妻の居る幸せよ  
何鳥か声もかそかなその声に魅かるる思いの頓に増すのは

佐藤道子

救急車 . 甲

一一九番素早く優しき電話口ほつと一息住所を告げぬ  
救急隊員若さ頼もしパニックの夫を背負ひて階段下る  
「このままでは意味がない」緊急入院三日後の夫  
「一人でトイレに行つて来た」助けぬ夫の寝言いちらし  
「万葉の会発足」楽しげに研究ばかり譚弁の夫  
この夏を語りし友の一人逝き淋しき卒寿のはじまりとなる  
給はりしモネのハンカチ卓上に睡蓮の光部屋に満ちくる

椎名恒治

道 . 橘

誤嚥性肺炎にて逝きぬとひさしく会はざりき北沢郁子さん  
諏訪湖畔鶴湖荘に栄一先生ともども晚餐せりき昭和の末に  
〈そば一人前〉は策二枚なりと初めて知りき信州にて  
「藍」終刊八王子市ウエルハイムにて一人いのち終りつ  
「あの世」への道は信せずと言ひたりき森村浅香の葬儀の帰り  
「常念の白き翼…」と詠みたりし郁子の歌の下の句忘れたり  
「芯強き叙情的歌人なりき」大西民子は郁子を評したりき一人亡し

鈴木結志 天平の宝物(一) ・福

後陽成天皇宸翰一行書品格富みにひき込まれゆく  
大ぶりの文字のびやかに後光厳天皇宸翰目より養う  
椽町天皇宸翰般若経金泥楷書なごむやわらき  
速筆のさやか後醍醐天皇の連綿体にひきこまれゆく  
温顔の千手観音工人の駆使の技に魅せられて佇つ  
空海の細字書写かつ綿密な美玉を称う深き味わい  
金剛峯寺高野にひらき空海の修法の世界今に息づく

世木田照比古 免許更新 ・茜

ロボットの動きを強いる幼子はすっかり園の先生気取り  
他愛なき幼の動作を真似てみる孫の去にたる夜のうつろに  
遠々の遠足の児らの帽子群微風にゆらぐ花群に似る  
「うっ」と声つまらせて詭む喪中はがき指折りてみる友と会いし日  
度毎に認知症への度合い進み免許更新にわが歳思う  
免許更新に物の名五個を失念す認知症への進度急なり  
認知症のテスト悪化を嘆けども車を捨てる気にもなれざれ

関根榮子 陳皮 ・埼

何となくわかるは若き日のことで今はわからぬことは排除す  
肯定は心地良きかな「そだねー」が流行語年間大賞をとる  
田圃にて残り藁など燃やすなし時に下り来し野鳥が漁る  
そこここに立ちし煙の今はなし済みし刈田のどこか寂しく  
立ち昇る煙はかつて一年の収穫済みし証なりしが  
いつよりかカフェと呼びいる喫茶店マッチを蒐めいし昔もありぬ  
丹念に陳皮を作りいし祖母や母思い出しつつ蜜柑を剥きぬ

関根和美 郭秀娟(ジャネット) ・埼

香港の葬りゆ戻り風習の朱の糸ゆわえし雨天いろづく  
わが町の百観音の湯この秋も訪うはずなりき香港より豪州より  
面ざしの似かよう妹ダイアナとケニー揃えば恋しよジャネット  
片言の日本語に英語チャンボンの会話を助ける漢字のちから  
ダイアナと夫のケントは豪州のシェフなりひと口ごとに味わう  
入浴ののちの驚きびん詰めの牛乳うましと目を丸くして  
紙バックロングライフに慣らされしこの舌よあわれと腕ひろげたり

久我田鶴子 こそくさ ・羊

お目当ての浦野理一は白き帯ちりめんじゆの伸びやかに舞ふ  
銀座なる灯屋?に勇みゆくゆきて売れたりの声を聞くはや  
勇みたる足はバタバタ宙を蹴り飛び去る鶴のまほろしを追ふ  
いくたびもネットに見ては高めるし「買ふぞモード」の碎け散りたり  
浦野ならほかにもあると言はれてもなんでもいいといふわけぢやない  
あきらめは早くこそくさ店を出るわれに憑きあらしものを落として  
ホコ天の銀座のにきはひ横に見てわしたショップに泡盛を買ふ





香川進の生きものの歌 4 田土 成彦

・鉄塊を曳きいでゆかむ牛顔へり二本の角を内側に曲げぬき 『湾』より

歌集『湾』は昭和二十七年から三十一年にかけての作で、「生産の姿をみてみたい」という衝動から「一夜百首的に出来た」作だという。また戦後の色濃く残るなかにも復興の息吹が顕著に感じ取れる時代であったかと思われる。その鉄を作る最先端の工場の中に鉄を運搬する手段として牛が活躍していたというのは何とも牧歌的な情景ではある。元来、農耕の動力として農家では耕牛が活躍していたのは知っていたが、こんな所まで彼らの活躍の場所があったというのは驚きであり、この歌の御陰でその存在を知ることが出来た。

重い鉄塊を曳いたあとの牛の姿。下句の「二本の角」を内側に曲げている描写が当然と言えば当然なのだけれど、何ともリアルで場の本質を突いた描写だと思ふ。全体のほんの一点なのだが、それしかないというような要点が切り取られている。製鉄所という喧噪の中で彼らだけがいる一画は不思議な和みと優しさで温かさを醸し出している。日本の戦後復興期の明るさ、力強さまでがほの見えて嬉しくなってしまう。時期的には自分の経営する東亜交易がつぶれ新しく木下産商に勤め始めた頃であり、また「地中海」創刊の頃でもあった。四十代前半、激動の時代を駆け抜けてゆく踏み切り板の上に立っていたのだ。

◆◆第一歌集の頃◆◆

大浪 美雪 『春潮』

平成九年十月十日発行 短歌研究社

●自選五首

- ・秋風に舞い舞う落葉手に受けて幼子一人風と遊べり
- ・風花と共に舞い立ち離れ住む夫居る町の雪になりたき
- ・気がつくときジャズのレコード終りおり冷えし紅茶を入れ替えに立つ
- ・雪の日に生れしわれに「美雪」という名を付け父はその夜征きたり
- ・薄原に満月大きく登る時白銀の穂のゆらり波打つ

●ミニエッセイ

仕事も二十年を過ぎ、子育ても一段落した頃、久方壽満子師より今までの歌をまとめてみないかと、声を掛けて頂いた。如何しようかと相談をした海炎の先輩から還暦後では体力的に厳しいし、先生が少しでも若い内に出しなさいと背中を押された。が、手順もわからず、結局、今までの歌をB4の原稿用紙に書き出しただけで、選歌、編集、装幀とすべてを先生のお世話になった。そんな中、用紙を決めるという日、出版社のある地下鉄護国寺駅のエスカレーター上で、前に立っていらしたはずの先生が気付いた時には、私もろとも倒れ、どのようにしてエスカレーターから降りたのか記憶はなく、「大丈夫ですか」と声をかけても先生は無言で、何事もなかったように出版社に向かわれた。要件を済ませ、いつもならお茶ということも言い出せぬまま、その後もこの一件には触れさせてもらえずにまっただまっただま、心に残っている。先生が骨折されなかったことがせめてもの救いとなっている第一歌集である。

## 今月の二人

### 北海道

辻田 聡美

大海原フェリーの外湯無防備であたまをよぎる「板子一枚」  
 虹立ちて消えゆくまでを無言にて夫と見つめる甲板は雨  
 ウエディングの前撮りらしき一団をダム湖のそばの木陰に見たり  
 重力から解き放たれしカバ二頭水中を跳ぶびょんびょん  
 百五十万本の盛りはとうに終わったと人の顔してひまわり一本  
 コスモスが鉄道ファンを出迎える木造駅舎 新十津川駅  
 一日に一往復の札沼線最終列車が午前十時とは  
 七月と八月の暦かべにありその日の乗車人数書かれて  
 客引きの俵夫はいずれもイケメンで筋肉質のアスリートなり  
 歴史ある小樽運河を人力のガイドでめぐる晩夏のたそがれ  
 ゴンドラで犬と登りし山の名はアイヌの言葉「ニセコアンヌプリ」  
 赤毛とう稲の品種を改良し長き努力が広げし水田  
 去年の夏観るだけだったカーリング今氷上で夫とプレーす

### 出逢い

三年前の二月、夫が大腸癌手術を受けた。癌は予想以上に大きく切除は出来なかった。スキルス癌、ステージIV余命半年という現実を、夫婦と二人の息子と優しい犬が分かち合うことになった。すぐに抗癌剤治療が始まり、暫くして夫は職場復帰した。

そんな時、音訳仲間の高津砂千子さんにマジックの助手を頼まれた。老人サロンのゲストマジシャンだ。簡単な打合せのあと約二時間、何とか役目を果たし帰宅した時にはぐったりと疲れていた。しかし、この二時間、夫の事も不安な思いも一切浮かんでこなかった。救われた思いだった。

高津先生が短歌をされていると知ったのはこの後の事である。歌を作っている間は不安や苦しみから解放された。歌が心の友となってくれたのだ。一年後、地中海にお誘いいただき今に至っている。

夫は、昨年無事定年を迎えた。治療は続いていたが、キャンピングカーで犬を連れ北海道を回ることが出来た。今年再びカーリングをする目的で北海道に行った。今回の歌はその時の歌である。

短歌との出逢いに感謝し、拙くとも自分の歌を愛し大切に育てたいと思っている。

## 今月の二人

### 秋の庭

岡本小由里

つぎつぎとときの花咲く秋の庭心やすまる朝のひととき  
 のこん菊咲き乱れたる秋の庭よろこびて来るみつばちの群  
 秋桜の一輪咲けるうすピンク我家の庭に明るさ添うる  
 澄みわたる朝の空気を吸いこむとかすかに香る金木犀が  
 オレンジの金木犀の散り花をのこして落ち葉はきよせる朝  
 庭をはく落ち葉の色とその数に秋の深まり思われる朝  
 台風の過ぎ去りし朝比叡山雄々しくそびえ白雲の湧く  
 白雲の湧きあがる様いろいろに姿を變うる雄々しき比叡  
 台風のまた近づけるしかも北山杉の大きくゆるる  
 来春の花のつぼみのはやばやと枝先にあり馬酔木の花は  
 やがて来る寒さきびしい冬のまを耐えきてひらく馬酔木の花よ  
 友からの贈られし花咲きにけり秋海棠と白ほととぎす  
 青空に高くそびゆる銀杏の木譲りてくれし友想わるる

日々是好日

朝はやく着物を着て帯をしめ、帯じめをキリリとしめると、今日一日何か佳きことあるような気がする。外へ出ると、青空に比叡山が雄々しくそびえ白雲が湧き上がる。ふり返ると我が家がかれまた青空をバックに白い壁と黒い柱で瓦屋根が光る。

朝な夕なに比叡山を仰いで共に四十四年暮らした夫を病で急に見送って、はや六年が過ぎる。夫は山鳩になり毎朝クルルークルルと私に話しかけてくれる。そんなさみしい暮らしを慰めてくれるのが、長年続けているお茶とお花の道だ。茶会や花会に出かけるのも楽しみだし、家の茶室で、ささやかな道具で友や社中と茶を点て、おしゃべりをするのも至福のひとときである。

また、庭には季節の花が次々と咲き、それを種々の花器に生け、写真をとり孫や子に送るのも楽しい。

京都洛北の岩倉の里の美しい自然に包まれ、在りし日の夫や姑の恩に感謝しつつ、家族、社中、友人の、そして世界中の人々の幸福と平和を祈る日々である。

そんな日々を支えて豊かにしてくれるのが短歌の世界であると感謝している。

◆今月の二人・辻田駿美作品評◆  
カバ二頭水中を跳ぶ

廿日市市在住の辻田さん。病を抱え定年まで勤めた夫との北海道旅行。キャンピングカーで犬も連れて、という。

・虹立ちて消えゆくまでを無言にて夫と見つめる甲板は雨  
キャンピングカーごと、フェリーに揺られて北海道まで行くのである。甲板で雨に濡れながら、消えるまで夫と黙って見つけた虹。ほかには何も言っていないが、並んだ二人の背中が見えるようだ。そして、そこに通い合う思いも。

・重力から解き放たれしカバ二頭水中を跳ぶびょんびょんと

水中で浮力のついたカバを「重力から解き放たれ」と表現し、水中の動きを「跳ぶ」「びょんびょん」と表現したのもカバのことでありながら、そのまま辻田さんが感じている解放感なんだろう。二頭というのも大事な要素であるにちがいない。

・百五十万本の盛りはとうに終わったと人の顔してひまわり一本

百五十万本の向日葵！その花の盛りには間に合わなかったのだろう。「とうに終わった」と告げてくるのは、人の顔した一本の向日葵。「人の顔した」が上手い。物語の中に自由に往き来する作者だ。百五十万本と一本という数の対照も心惜い。

・去年の夏観ただけだったカーリング今氷上で夫とプレーす  
昨年の夏の旅ではできなかったカーリングを、今年は夫と一緒にプレーできる。夫の体調もきつといいのだろう。「今」に注目する。「今」という時間の掛け替えのなさを、夫と一緒にプレーする中できつと強く実感したことだろう。

◆今月の二人・岡本小由里作品評◆  
来春の花のつぼみ

評者・久我田鶴子

岡本さんは、京都市岩倉に住む。比叡山の麓だ。六年前に夫を亡くした暮らしたが、「日々是好日」と送っている

・つきつきとときの花咲く秋の庭心やすまる朝のひとつき

「ときの花咲く」は、季節の花が咲くということだろう。この「とき」は秋。朝の庭に出て、咲いた秋の花に心やすまる時間を持ち、機嫌良く過ごしている。言葉のリズムもいい。

・秋桜の一輪咲けるうすピンク我家の庭に明るさ添うる

一輪咲いたコスモスの花の薄いピンク。その色が庭に明るさを添えてくれることよ、と花に向けられる感謝の念がそこはかとなく感じられる歌だ。

・オレンジの金木犀の散り花をのこして落ち葉はきよせる朝

金木犀が散ると、木の下にオレンジ色の輪ができる。その散り花を惜しんでいるのである。朝の落ち葉掃きだが、金木犀の散り花は残して、落ち葉だけを掃き寄せる。

・台風の過ぎ去りし朝比叡山雄々しくそびえ白雲の湧く

台風一過の朝。比叡山の雄々しい姿に、湧くような白雲。普段とはやや趣を異にする比叡山の姿だったのだろう。夫と共に仰いだ比叡山であることを思えば、亡き夫のことも偲ばれたかもしれない。

・来春の花のつぼみはやばやと枝先にあり馬酔木の花は

今年の花が終われば、もう次の春の花の準備を始めている馬酔木である。咲くまではまだまだなのに、こんなにも早く来春の花のつぼみが……と。この驚きの中には、花の健気さに対する驚きや先へ先へとゆく季節に対する驚きがあるようだ。

平成十七年、呉羽神社内の一室にて初めて新年歌会を見学しました。小学校のクラスメイトの誘いに、短歌は三十一文字を詠むだけで、病気で寝ていても作れると言われました。当時の大阪支社長は、中学二年の担任だった奥田清和先生。中学、高校の同期の友人の懐かしい顔を見つめました。体力、歌心、何の自信もないままに早く返事をと、急かされて地中海に入会しました。高校の万葉集の授業に当てられて額田王と大海人皇子の名と歌をとんでもない読み方をして恥をかきました。近江の蒲生の紫野を最近まで京の大徳寺辺りと思っていました。

幼い頃から本は大好き、姉の読むのを受け続いて読むことが長い習慣です。戦後の本の少ないころ、姉が学校図書館から借りてきた分厚い世界文学全集のスウィフトは奇想天外で読み切れず、ブロンテ姉妹は面白くて読み続けました。漢字はふりがな付きの文語体だったように記憶します。そのうちに角川書店の昭和文学全集、新潮社の世界文学全集等が出版され、貪欲に本は何でも読みあさりしました。高校のころ、月六冊の月刊誌が回覧されました。硫酸紙でカバーがかけられて自転車で廻って来るのです。「映画の友」の淀川長治、「スタイル」

廃刊されるまでの宇野千代など、回覧は数年続きました。他に中原淳一の「ひまわり、それいゆ」は創刊以来。「婦人之友」「暮らしの手帖」は母が長年。週刊誌は、朝日、毎日、新潮などを父が購入。新聞の連載小説もたいてい読んでいました。雑念多く大雑把な物語の好きな人になりました。短大人学すぐに病氣療養の身になり、手あたり次第に文字を追っかけていました。



病が抜け父が新たに創業した会社に行く事になり、簿記を教わりました。数年後、父が姉の一家を名古屋から迎えて会社に入社し、仕事も住まいも一緒。父は、義兄と会社の経営に心血を注いでいました。義兄の本棚からSFの「ローダンシリーズ」を借りました。先日、京都大学の山中教授も愛読

されていて近ごろはこの本に書かれていることで実現されていることも多いという記事を読んで嬉しくなりました。これまで知らなかったジャンルの本も面白く読みました。

言語芸術のうち、例えば『源氏物語』の文中に歌があるのはよくわかりませんが、一首でも独立したものでなければならぬとなると難しく、苦心しています。歌会お互いに意見交換するのは大変楽しく、思いと違う解釈に議論が白熱するのも面白い。

初めのころは奥田先生のお宅にお邪魔してご指導をいただきました。先生の言葉の豊富なことに驚き、自分の知識のなさを痛感しました。病中に読んだ片岡美智の『人間この複雑なもの』に感化されました。多くの人の出会いを書いてあります。作家の年譜を読み時代背景など想像し、他の人と比較すると良く解ります。地中海誌、歌会、全国大会に多くの歌を通してより深く、親しみました。昔のように速く流し読みはできない、目が疎くなりました。ゆっくりとした気持ち、いい加減から少しは豊かに生き、今は何でもよく見て思いのままに歌に詠みたいと願っています。詠むことを休めばすぐ「小人閑居して不善をなす」ことになりそうです。